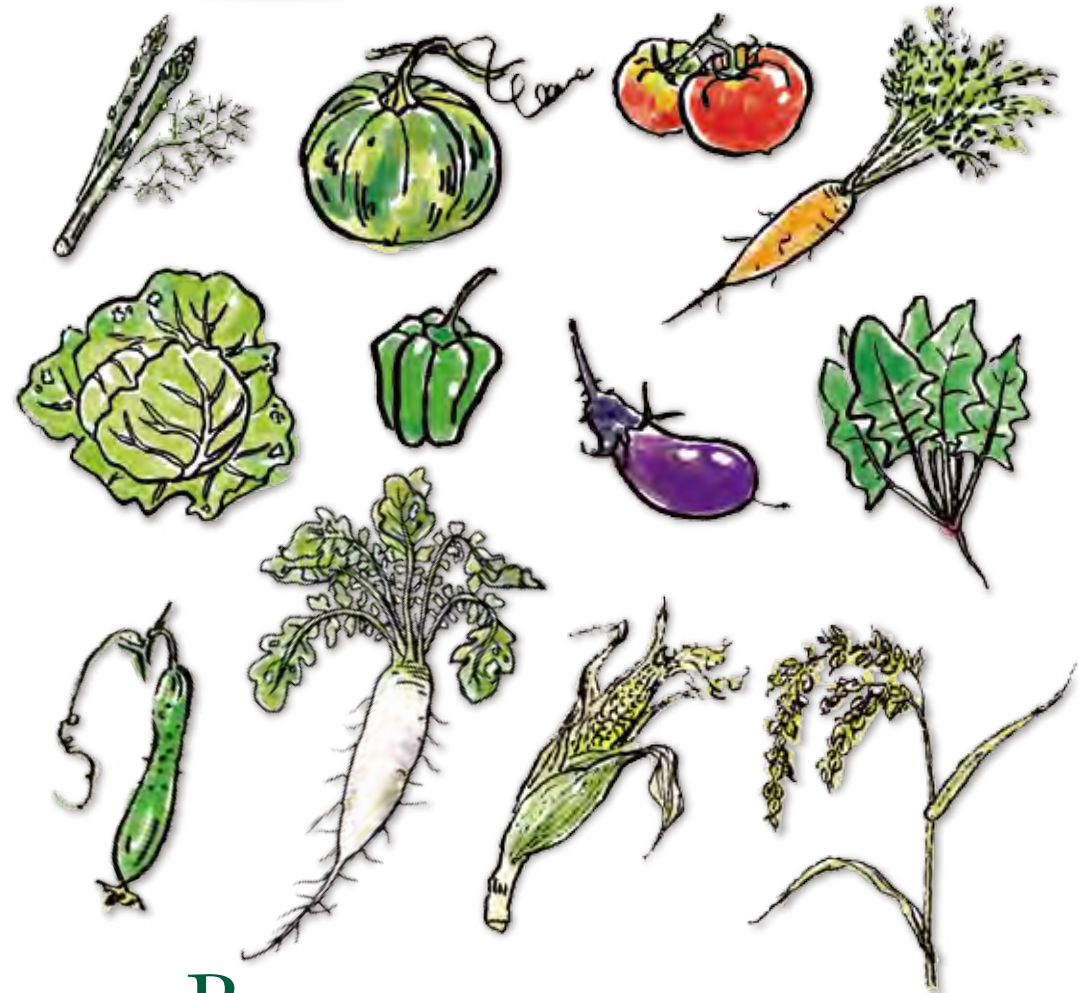


A Guide for Organic Farming

有機農業を仕事に!!

チャレンジする人のための入門ガイド



【お問い合わせ】

全国農業会議所
全国新規就農相談センター

〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル2階
TEL 03-6268-9500 03-6910-1126(平日10:00~17:00)
FAX 03-3237-6811 03-3261-5131

Be
Farmer

きっと見つかる あなたの農業

全国新規就農相談センター



Contents

有機農業の将来は明るい	3
有機農業とは	4
有機農業を始めるまでの流れ	7
研修制度の紹介	10
就農事例	14
生産法人から新規就農者へのアドバイス	22
有機農業研修先の一例	24
Q&A 有機農業&就農なんでも相談	25
有機農業 Information	28

Message for Tomorrow

有機農業の将来は明るい

～有機農業に関心をもつ皆さまに贈ることば～

1980年代なかばまでは、有機農業という言葉自体が一般には知られていませんでした。数少ない有機農業者たちは、努力を積み重ねてきました。そして現在では、国が法律で有機農業を推進する時代になりました。21世紀における最大の課題は、地域と地球の環境の保全と、自然と共生した循環型社会の形成です。有機農業という仕事は、環境と生態系と人びとの暮らしを守ることにもっとも貢献し、再生可能エネルギーの自給への道も開きます。

つくり手の顔が見える、関係性豊かな、安心できる食べ物を求める人びとは、確実に増えました。そして、若い世代で農への関心が急速に高まり、農外からの応援団も多くいます。経済状況がどうなるろうとも、この流れは簡単には変わりません。いま盛んになっている地産地消や直売にせよ、加工や流通を自前でこなす第6次産業化にせよ、市民参加型農にせよ、有機農業者たちが先駆的に行ってきた取り組みです。それが時代の流れになりました。

有機農業による新規就農は、簡単ではありません。農地や作物に合った栽培技術をみがかなければならないし、病虫害に対応する必要もあるし、消費者も探さなければならないからです。でも、それらの結果として収穫物が得られ、収入につながるのですから、苦勞はしても基本的に

は楽しい営みではないでしょうか。資材の低投入に加えて、自然との共生や資源の内部循環を進める技術も確立されつつあります。収量も徐々に上がっていくことは、先輩たちの実践が示しているところです。有機農業者同士の技術交流をより深めていけば、美味しい農産物が継続して栽培できるでしょう。

そして、安定して生産できるようになったら、消費者や児童・生徒が生産現場を種播きから加工まで体験する機会を設けたり、学校給食に提供していきましょう。そこでのちや自然とのふれあいが生まれ、有機農業のサポーターが増え、地域で支持される存在、新たな公共の担い手になっていきます。

有機農業は決して「もう一つの農業」ではありません。人類が長年にわたって当たり前に行ってきた「本来の農業」なのです。多品目少量による消費者との提携、得意な品目を中心につくり仲間とグループ化するスタイル、地場産業やレストランとの直結、オーガニックフェスタや朝市など、自分に合ったさまざまなやり方で有機農業の世界を広げていってください。



有機農業とは

健やかな土が健全な作物を育て、人の健康を支えます。
土の健康をイメージした管理を行い、地域の自然資源を活用することで、多くの生きものが共存・共生する世界をつくる必要があります。
その生きもの同士の関係によってさまざまな問題を解決していくのが有機農業です。

有機農業の本質

有機農業推進法において、有機農業とは「化学的に合成された肥料および農薬を使用しないこと並びに遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業」(第2条)と定義されています。しかし、「化学肥料や農薬を使用しない」という行為より、「化学肥料や農薬を必要としない」生産システムを創りあげることに、有機農業の本質があります。

生きもの同士の共生関係を大切にす

有機農業では、生きもの同士の共存・共生関係を尊重し、生物のエネルギー源や棲みかとなる、いろいろな有機物を土に補給することで、化学肥料や農薬を必要としない栽培環境を形成しています。

生きもの同士の関係が豊かになり、食べる・食べられる・棲み分ける、などの関係が多く築かれるようになると、特定の生きものだけが爆発的に増えることがないため、たとえ病原菌や害虫がいても、大きな被害は出なくなります。

農薬による防除とは異なり、この仕組みが栽培技術の根本にあるのが大きな特徴です。

健康な土から健康な作物が生まれる

生きもの同士が豊かに共存するこの環境を人であれば、「健康」であり「抵抗力」がある状態、つまり土が健康だということです。同じこと

は作物にもいえます。健康な作物は、病原菌や害虫への抵抗性や回復力を持っているのです。

土の健康を支えるのは有機物です。また、それが土のなかの多くの生きもの暮らしを支え、巡り巡って作物の栄養源になります。いければ有機物は土の食べ物といついででしょう。ここで注意したいのは、土に必要な有機物を与えないことです。土が食べ過ぎの状態になると、そこに棲む生きもの種類は単純なものになってしまうからです。

有機物の量は多ければよいだけでなく、少し足りない程度が、栽培に有用なさまざまな生きもの働きを引き出し、作物も健康に育つようです。健康な野菜の葉の多くは、濁った濃い緑色ではなく、鮮やかな浅緑色をしています。また、生長に肥料を多く必要とする品種ではなく、少ない肥料分で育つ品種を選ぶことも大切です。したがって、こうした野菜をつくるには、資材依存型有機農業より低投入型有機農業がよいといえます(p6表1)。



健康な野菜は葉の色が濃すぎず形に規則性がある

地域の有機物資源を活用する

有機物を利用する場合、可能な限りその地域にある自然資源を活かし、自然界の大きな物質循環の仕組みをお手本にすることです。生きものは太陽のエネルギーを利用して地域の資源をさまざまな形に変え、また生きもの同士で養分などをやり取りしています。その仕組みをできるだけ壊さずに、作物を少しでも有利にしてあげる管理が大切です。山林の落ち葉も、家畜のふん尿も、食べ物の残りかすも、すべて田畑の資源になります。すなわち、日本の伝統的な循環を新しい形で再構築していくことが大切です。

有機農業は、使う有機物の量や質に配慮し、地域の資源を活かしながら、田畑の生きものをバランスよく管理します。健康な土が作物を健康にし、健康に育った作物が人の健康を支えます。健康な状態を保つことでいろいろな問題を解決する持続可能な生産システムなのです。



伝統的な農業の循環



生物圏における主な物質循環



有機農業を始めるまでの流れ

有機農業と慣行農業の違い

有機農業と慣行農業との病虫害防除、雑草の扱い方、肥料について、その対応の違いを示しました(表1)。ただし、もっとも重要な違いは、田畑で生じる現象のとらえ方です。

慣行農業では、栽培環境を分析的にとらえ、不足した養分は化学肥料で、病虫害、雑草に対しては農薬で、というように、個別的、対処療法的な方法を取っています。

一方、有機農業では、田畑全体を多くの種類・量の生きものが暮らせる一つの生態系としてとらえています。慣行農業のように、病虫害の発生に対して直接対応する農薬などのマニュアルはありません。しかし、先に述べた生きもの同士の関係を大切に管理により、特定の生きものだけが爆発的に増えることを抑制する機能が発揮されるようになります。

病虫害が発生したときに、対処療法として安易に農薬を使うと、生態系にそなわっている、病虫害の発生を抑制する機能がうまく形成されません。したがって、慣行農業の田畑で見られる現象から有機農業の田畑を想像しても、理解できない現象が多くあります。

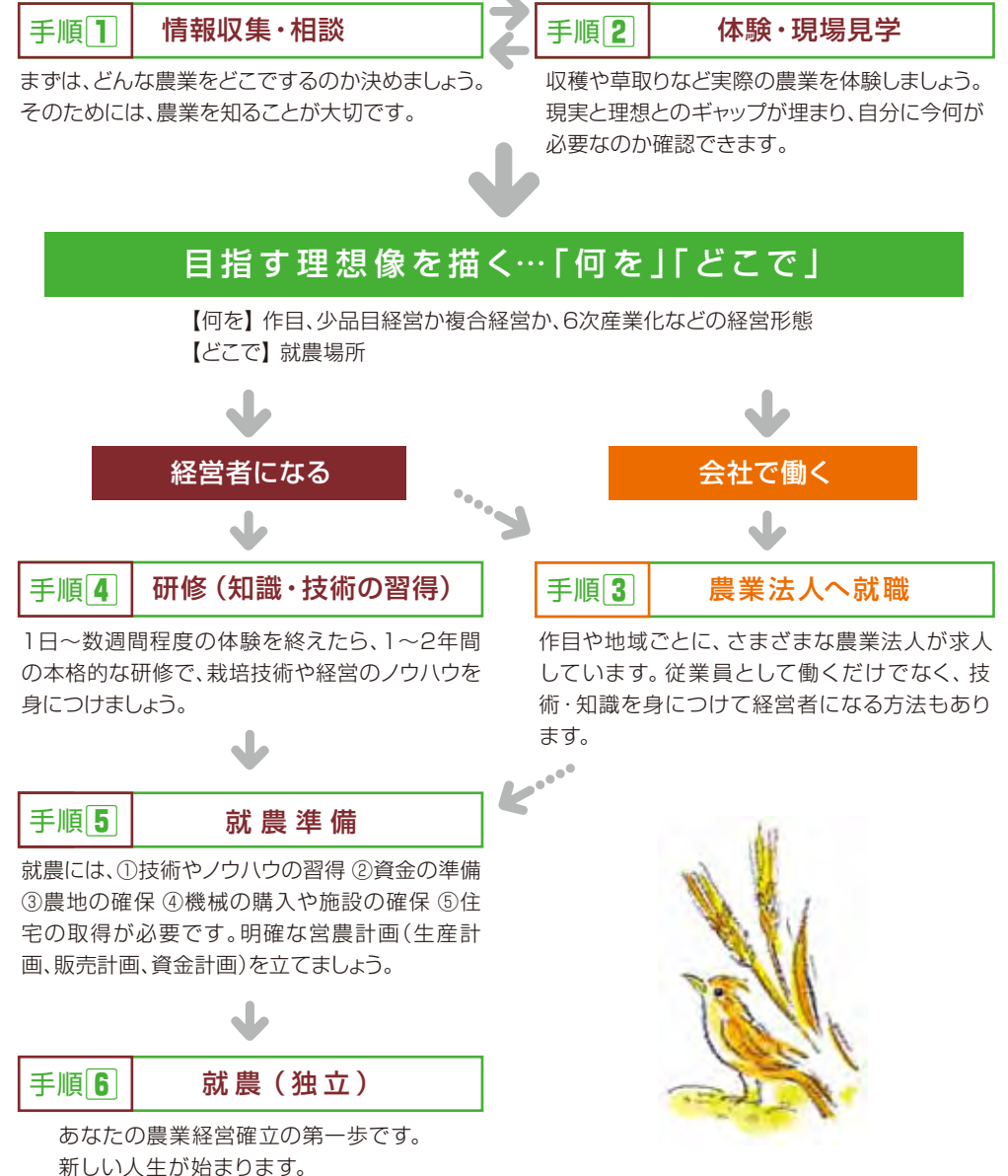
田畑を全体的、統一的なシステムとしてとらえるなかで、その時々に応じた方法で、病虫害や雑草に対応しているのが有機農業です。したがって、同一地域内、同じ農家が栽培するほ場ごとでも、病虫害や雑草の対処の仕方は異なります。有機農業を理解するには、慣行農業との田畑の見方、とらえ方に基本的な違いがあることを認識することが大切です。

(文/西村和雄)

[表 1] 栽培方法の分類

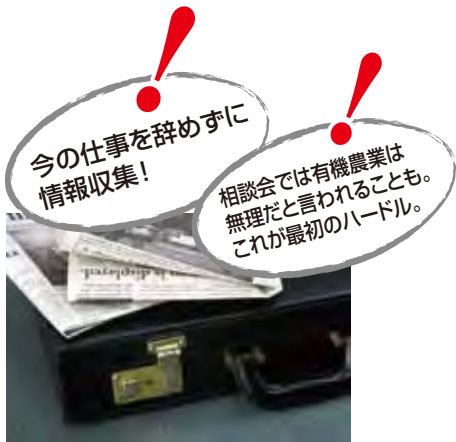
栽培方法	病虫害の防除	雑草(野草)の扱い方	肥料
慣行農業	化学合成農薬に依存して病虫害を防除	除草剤などを使用	化学肥料を使用
環境保全型農業	病虫害が発生しにくい栽培環境づくりに努め、化学合成農薬の使用量を軽減	雑草が発生しにくい栽培環境づくりに努め、除草剤の使用量を軽減	土づくりを励行し、化学肥料の使用量を軽減
有機農業	資材利用型	天然成分由来の農薬や生物農薬で病虫害を防除	除草したり、マルチ資材による防除
	低投入型	枯れた植物を敷く草マルチなどにより、作物とそれ以外の草が、どちらかという共生している	鶏ふんや牛ふんの堆肥など、チッ素分の多い有機肥料を利用

NHK「趣味の園芸 やさいの時間」2011年1月号 p54～p61「西村和雄氏に聞く有機栽培徹底Q&A」を参考に作図



手順1 情報や基礎知識の収集

有機農業の情報は、慣行農業に比べて少ないのが現状。正しい知識を身につけるためにも、本やインターネットで情報を調べ、相談窓口や就農相談会(たとえば新・農業人フェアなど)で具体的な話を聞き、さらに現地へ行きましょう。そして、経営者になるのか従業員として働くのか、どこで(就農地)何を(営農作物)つくるのか、考えをまとめましょう。成功には計画が大切。今の仕事を辞める前に、情報を集めてください。



手順2 体験・現場見学

夢を実現するためには、自分に何が 필요한のかを知ることが大切。必ず現場に足を運び、体験しましょう。全国農業会議所では、全国の農業法人など約200社で体験可能な「農業インターンシップ」や、茨城県の日本農業実践学園で3日間から体験可能な「チャレンジ・ザ・農業体験」を実施しています。また、有機農業相談窓口(p30)では、体験可能な農家を紹介してくれます。



手順3 農業法人へ就職

会社として農業を営む「農業法人」に就職するのも、農業を仕事にする一つの方法です。独立就農を支援してくれる農業法人もあります。求人情報や研修先情報を通して、何を身につけられるのかをよく吟味して就職を決めることが大切です。求人は、ハローワークや全国新規就農相談センターのHPから探しましょう。



手順4 研修(知識・技術の習得)

農業を始めるためには、技術の習得が必要。理想の有機農業のスタイルを見つけたら、1~2年間の研修をしましょう。研修先は、個人農家・学校・農業法人があります。栽培技術だけではなく、経営管理、販売方法、農村での暮らし、消費者との接し方についても学びましょう。就農を希望する場所の近くで研修すれば、空いている農地や住居の情報が得やすくなります。研修先の選定は慎重に。



手順5 就農準備

農地探し、家探し、道具や機械の入手など、就農には多くの準備が必要です。また家族を持っている場合は、その理解を得ることも大切。新規就農とは、事業の経営者になることです。就農後の生計を成り立たせるために、計画(資金・営農)は必ずつくって、多くの人に見てもらいましょう。自治体によっては、就農支援事業を利用できる場合があります。



手順6 就農(独立)

就農してからが本当の始まりです。1年目は技術が未熟で、所得も予想より少ない場合が少なくありません。また、技術向上のためにも、地域に適した品目や気候を知り、先進的有機農家の話を聞きましょう。さらに、農村で暮らすことは農村社会の一員になること。農村にうまく溶け込むために、集落の集まりには積極的に参加し、腹を割って相談できる相手をつくり、地域との信頼関係を築きましょう。



「霜里農場」

農林水産省の農業者大学校を卒業した1971年より、地元で有機農業に取り組んでいます。

79年より継続して受け入れた研修生は120名を超え、多くの新規就農者を輩出してきました（海外41ヶ国からの長期・短期の研修生も含む）。2012年から国の青年就農給付金（準備型）の給付要件を満たす研修先として、埼玉県指定農家になっています。

地元で就農した研修生はもちろん、2001年からは近隣の慣行栽培農家が、大豆、小麦、水稲を有機農業での栽培に転換し、09年には集落全体が有機農業を実施するようになりました。消費者に直接農産物を届けることから始まった販路は、道の駅や直売所、レストラン、地場食品産業、地元企業との提携へと広がっています。

現在の経営

主な栽培品目: 米、麦、大豆、年間約60品目の野菜

栽培面積など: 水稲120a、畑作物140a、施設野菜5a、乳用牛1頭、肉用牛2頭、鶏100羽

労働力: 本人、妻、4~6名の宿泊可能な研修生

土づくりが基本

有機農業を成功させるポイントは土づくりです。私の農場の農作物は、元の素材が確認できる材料でつくった堆肥と有機質肥料だけを使って栽培しています。

有機農業を始めた当初は、牛ふんを中心とした堆肥を10aあたり約5t投入していましたが、3年程度で多種多様な土の生きものが増え、だいに堆肥の量を減らしていきました。今では、落ち葉や剪定枝など植物質主体の堆肥を10aあたり1~2t程度。病害虫の被害は減少し、品質のよい農作物が安定的に生産できています。



地場産業との連携

有機農業を始めたころから、地場産業との連携を模索していました。初めは日本酒。明治時代から続く地元の造り酒屋が、1988年になって有機農業の米を使った日本酒造りを提案してきました。その考えに呼応し、仲間とともに酒米を作付け、提供しています。同じころ、精麦業者が農場の小麦を使って、うどんづくりを始めました。石臼挽きの地粉めんが製品化されています。94年からは、近くの町の醸造業者の依頼で、醤油に使う大豆と小麦を出荷、99年からは隣接する町の豆腐屋に大豆を出荷するようになりました。

これらに共通するのは、農家が再生産できる価格で農産物が買い取られていることです。安全で、安心できて美味しい加工品は、消費者に高く評価されています。有機農業には農民としてのほこりと喜びがあり、しかも経営的にも慣行栽培より収益が上げられているのです。

また、地元で新規就農した若者たちが中心となって小川町有機農業生産グループを結成し、直売所や地元のレストランに有機農産物を出荷するなど、有機農業が地域に根付いています。



研修の特徴

10代から50代後半までを対象に、四季を通じた1年間（可能なら2年間）の研修が基本です。少なくとも1日の農業体験を済ませてから面談し、農業をするということ、とくに地域共同体の一員になるということへの理解を基準に受け入れを決めています。向かない人には、はっきりと断ってきました。

研修内容は、地域での付き合い、土づくり、水稲・野菜づくり、家畜の管理、販売能力などです。2人1部屋の宿泊施設を3部屋完備し、研修生には朝食、夕食を交代で調理し、家族同様の生活をしてもらいます。研修費用は不要です。公的機関などからの受け入れについては担当者と相談して決めています。

これから就農される方へ

土づくりに早くて3年、作物が安定生産でき、自信がつくまでには少なくとも10年かかると思ってください。自分が一生暮らしたいと思う土地で、信頼のある農家のもとで少なくとも1年間研修し、研修先の紹介でその地に就農、数年間はアドバイスを受けながら自立を目指すことをお勧めします。



問い合わせ先

〒355-0323 埼玉県比企郡小川町下里809

霜里農場 金子美登よしのり

TEL&FAX: 0493-73-0758

E-mail: simosato@bb.knet.ne.jp

<http://www.shimosato-farm.com/>



研修助成費をもらいながら有機農業（野菜）を学ぶことができる研修制度です。毎年1家族を受け入れ、2012年の研修で14期目になります。研修生はほとんど茨城県外出身者で、有機農業をしたいという強い希望をもって集まってきた方ばかりです。家庭の事情があった1組を除き、すべての方が就農に成功しています。

研修の特徴

①研修は2年間、自発的に学ぶ

1年目に野菜栽培を学び、2年目に復習するというカリキュラムです。この間、手取り足取り技術の指導を受けるのではなく、研修生は自発的に有機栽培部会の仲間から聞いて、農業を学びます。研修のときから、一人の生産者として扱われ、自立を求められます。これが、この研修の新規就農者に離農者がほとんどいない理由です。

②応募者は既婚者に限る

既婚者は家族の生活を背負っているの、並大抵の覚悟がなければ就農しないという考えからです。農村での生活や子育てについても有機栽培部会の仲間が相談に乗ってくれます。

③研修助成費

国の青年就農給付金により、年間150万円を2年間支給されます。（※2012年現在）

④研修用農地・農業用機械は無料で貸与

JAが有機JAS認証ほ場90aを無料で貸与します。トラクターなどの農機具もJAが無料で貸与します。

⑤研修中の売り上げ

売り上げはJAの口座で管理し、研修終了後に就農準備金として研修生に支給されます。

⑥販売はJAがサポート

販売はJAやさとの有機野菜販売ルートを使用するため、最初から苦労をせずに販売先が確保できます。

部会のメンバーを通じて独立後の農地を確保

研修後の農地は準備していませんので、就農者は自分で農地を探すことになります。農地は、研修中に交流を深めた有機栽培部会のメンバーを通じて紹介を受けることがほとんどです。

そのためにも、地域との絆づくりが大切です。幸い、すべての研修生は、終了前には就農に必要な農地は確保して、土づくりまで行っています。

就農にあたって必要なポイントは、①技術、②農地、③販路、④自己資金、⑤住居の5つです。このうち①から④については、「ゆめファームやさと」のなかで解決できます。

この地区で問題になるのは、⑤住居のことで、空き家で持ち主が貸す気があるような物件は、なかなか見つからないのが現状です。

住居の問題が解決できれば、「ゆめファームやさと」は、ほぼ間違いなく就農できる制度であると自負しています。（文／柴山 進）

問い合わせ先

〒315-0016 茨城県石岡市柿岡3594-1

JAやさと営農指導課

TEL: 0299-44-1661

FAX: 0299-44-1660

E-mail: Jayasato-yu-ki@cosmos.ocn.ne.jp

http://www.ja-yasato.com/



島根県立農林大学校は島根県大田市に位置し、島根県内の農業や林業の担い手を養成することを目的に研修教育を行っています。2012年度からは、「安全・安心」など農産物への時代のニーズに応えるために、全国の農業大学校のなかでも初めてとなる有機農業専攻を新たに設置し、有機農業の担い手の育成を始めました。

教育の目的

島根県の農林業をリードする農業者および林業管理技術者の養成。

設備

水田1.2ha、露地畑15a、ハウス8a、機械一式。

教育の特色

①農林業の技術者として必要な専門教育のみで教育カリキュラムを編成。②実習を重視した実践教育（年間授業時間の約半分が実習）。③学生主体のプロジェクト学習。

有機農業専攻を設けた経緯

島根県は豊かな自然環境に恵まれるとともに有機農業に取り組む先進的な農業者および地域も存在している有機農業の適地です。県では今後の島根県農業の推進方向の一つとして有機農業を位置づけ、2012年度から農林大学校に有機農業専攻を設置しました。

募集の概要

有機農業専攻では、7名（2012年度は初年度であり、1年生のみ）の学生が学んでいます。ほとんどの学生が、将来は自営就農や生産法人などでの雇用就農など有機農業生産の現場で働くことを目標に、当校の門をくぐりました。

有機農業への転換1年目のほ場で実習を行っていますので、土づくりなどに苦労しながら有機農産物の栽培に取り組んでいます。

募集人員および修業年限

有機農業専攻は、他の専攻（野菜、花き、果樹、肉用牛）とともに農業科に所属し、合計定員が30名です。修業年限は2年です。

経費

入学金：5,650円、授業料：9,900円/月、教材

費：30～40万円/2年（なお、2012年度の額であり、変更される場合があります）。

受験資格

高等学校の卒業生および入学年の3月までに卒業見込みの者であって、当校卒業後島根県内において就農し、農林業振興と農山村社会の発展に貢献すると見込まれる者です。

教育科目（有機農業専攻）

野菜、水稲について有機農業の理念、土づくり、病虫害防除法、雑草対策などの基礎技術を習得します。また、県内の先進的な取り組み農家の協力も得て就農に向けた実践的な実習に取り組んでいます。

問い合わせ先

島根県立農林大学校

〒699-2211 島根県大田市波根町970番1

TEL: 0854-85-7011

http://www.pref.shimane.lg.jp/norindaigakko/



自分らしさが出るHPでいろいろな有機野菜を宅配

ごんべえ農園 (http://www.geocities.jp/nouen_gonbei04/page01)

古井寛人 (ふるい ひろひと) 1978年生まれ

住所: 茨城県石岡市八郷地区

家族・労働力: 本人・真木彩子 (入籍予定)、月1~2回の援農(2~5人程度)

就農までの経緯

愛知県出身。八郷地区で畜複合経営を行っている「たまごの会」に、1年間大学を休学し住み込み研修。復学後、同地区の宇治田農場で住み込み研修をしながら有機農業の地域的広がりをテーマに卒論を作成中に有機農家と知り合いになり、家・農地などの情報を収集。2004年卒業後、約1haの耕作放棄地を借りて就農。

現在の経営

主な栽培品目: 少量多品目栽培 (約50品目) による旬の露地野菜を生産

経営面積: 約1.8ha

農家研修を通して栽培法や経営を学んで就農

「たまごの会」での研修を通して、鶏・豚・野菜・米の生産を行い、循環型有機農業を経験し、宇治田農場では多品目の野菜づくりとともに個人農家の経営感覚を学びました。この二つがとてもよかったと思います。

八郷地区は有機農家が多く、農家同士の交流も比較的盛んです。研修時代に広がった人とのつながりを大事にしたかったので、そのまま同地区に就農しました。就農後はJAやさそ有機栽培部会に5年在籍。定例会やほ場見学会で、品種の選定・トンネルやべた掛け、各野菜の栽培ポイントなどを学びました。自己就農資金はアルバイトで得た100万円程度です。就農から2年程はアルバイトしながらの農業でした。

「食べて美味しい野菜」への徹底したこだわり

学生時代の援農体験で、食・自然・環境・生活が当たり前のように結びつく有機農業に強烈に惹かれました。季節ごとに畑で食べたトマトやカブなどがとても美味しかったのが、いまでも忘れられません。美味しさは人を自然と笑顔にしてくれます。

就農当初は地元の鶏ふんや豚ふんを安く分けていただき、発酵させて堆肥として使っていましたが、近年は畑を増やしたこともあり、ソルゴーなどの緑肥栽培を取り入れて、チッ素が効きすぎないようにし、多少小振りでも柔らかく素直な味の野菜ができるようにしています。発酵肥料は米ぬか主体に変え、食味の向上に努めて



います。

「食べて美味しい野菜」にこだわり、同じ品目でも品種はかなり細かく選んでいます。毎年少しずつ気になる品種を試しながら、野菜セットに取り入れるか検討し、「一番美味しい旬」を意識するうち、おのずと多品目栽培になりました。

チラシを配り、個別宅配の顧客を確保

季節の野菜セット約10品目を入れた「野菜日和Box」(送料込2400円)を宅配便で送っています。1週間で無理なく食べられる量を、毎週ないし隔週1回送ります(3月下旬~4月上旬の端境期は休む場合も)。継続購入の方には、「直前お知らせメール」で、何が届くか事前に分かるようにしています。顧客が安定してくるまでの2年間は常にチラシをもって回り、住宅地や団地を中心に配りました。

就農時は、技術的には未熟ながらも「野菜のお兄さん」という感じで、多くのお客様に食べることで応援していただきました。年齢や経済状況、性格などで強みも大きく変わりますが、そこを長所として販路に活かしていければスムーズにスタートできるでしょう。



きれいなHPではなく、自分らしさが出るようなHPを

HPの作成は大変ですが、一度つくれば後の販路拡大が楽になります。ワードやエクセル程度の知識があれば、市販(あるいは無料)の作成ソフトで枠組みは簡単にできます。一旦公開し、必要に応じて少しずつ追加・手直ししてきました。必要と感じた時点で難しい知識や技術を学んで追加しています。HPやブログでのリアルタイムな野菜の状況の更新が新たな顧客の獲得につながってきました。

「きれいなHP」ではなく、「自分らしさ」が出るようなHPを意識しています。大手流通業者の精練された魅せるウェブサイトがたくさんあるなか、多少デコボコでも「ごんべえ農園らしさ」に惹かれたお客様が野菜を購入してくれます。「有機野菜がほしい」から「ごんべえ農園の野菜がほしい」という形になるように目指しています。

ネット販売では、お客様も生産者も、お互いの顔がなかなか見えません。いろいろな工夫で距離を縮めることが大切です。野菜についての連絡やお便りを通して、より充実した農園らしさを届けられるように努力しています。また、セット野菜という販売方法では、生産者が「つくりたい野菜」とお客様が「食べたい野菜」が必ず一致するとは限りません。そこで、自宅から約40分のつくば市内へは直接配達を行い、そのときの雰囲気や声をフィードバックして、品目の参考にしています。

インターネットによる直販のメリット

- 野菜セットの中身や栽培のようすなどをメールやHPを通じて紹介することができる。
- 自分のスタイルや生産規模にあった販売ができる。
- 消費者との距離が遠い地域でも販路の拡大ができる。



美味しい多品目野菜を！

千葉康伸 (ちば やすのぶ) 1977年生まれ
住所：神奈川県愛甲郡愛川町
家族・労働力：本人および妻（ただし妻は子育てが主体）
就農までの経緯

神奈川県出身（神奈川で生まれ、小学校からは埼玉県）。東京で、金融関係のSE(システムエンジニア)として勤務。「東京で食べる野菜は美味しくない、美味しい野菜をつくれれば勝負できるのではないか、「食」は無くならない農業っていいよね」と妻と話しているなかで、有機農業を決意し、30歳で退社。新・農業人フェアで高知県の有機のがっこう「土佐自然塾」を知り、のちに高知県へ行って、塾長に会い、ここで研修をすれば自信をもって有機農業ができる技術が身につくと思入塾。その後「山下農園」で学び、合計2年間研修をし、神奈川県で就農。

現在の経営

主な栽培品目：人参、里芋、ニンニク、タマネギ、オクラなどの野菜を1シーズン15~20品目
年間約40品目を栽培
経営面積：1.7ha（自宅から500m以内で11か所の農地を管理）



就農地と家探しに苦労

土質が良く1ha以上を借りられるような就農地や家を見つけることに苦労しました。市町村など公的機関に4か所、知り合いの農家はもちろん、あっせんしてもらった農家などにも聞いて回りました。公的機関では、担当者に有機農業への理解がなく、有機農業で就農したいことを伝えると態度が変わることもありました。

多くの人に助けられ就農、そして仲間づくりへ

神奈川県愛川町農業委員会の事務局長が、縁もゆかりも無い僕に、とても親切に対応してくれました。その上、親切な地元の方たちのおかげで農地と住宅も借りることができました。

多品目の野菜をレストランに40%、スーパーと生協にそれぞれ25%、残りの10%は直売所とセット野菜で販売しています。販売先についてもいろいろな人に助けられて、3年目で目標とした売上げ500万円を達成し、農業を生業として生きていく土台ができました。とにかくコツコツとよいものをつくっていけば周りが評価してくれるということを実感しています。

これからの目標は研修生を受け入れること。受け入れた研修生が愛川町で就農し、互いに切磋琢磨するような仲間づくりをしたいです。やはり刺激しあえる仲間は大切です。そして、愛川町を有機の里にしたいと願っています。



少量多品目栽培のメリット

- いろいろな味わいを多くの人に提供できる。
- 品目が多いためリピート購入の機会に恵まれている。
- 一つの作物に偏らないため収穫変動のリスクが少ない。



とにかく、稲作をやりたいくて独立就農

山口俊樹 (やまぐち としき) 1978年生まれ <<http://agrythm.blog.fc2.com/>>

住所：群馬県藤岡市

家族・労働力：本人

就農までの経緯

神奈川県出身。30歳を目前に、サラリーマン生活への疑問を感じ、食べ物への関心から農業に興味を持ち、複数の農家を訪問。2008年、栃木県の有機農家で研修を受けるも、事前の説明と実際の指導が異なったため辞め、いったん同県内の民間稲作研究所認証センターに勤務。しかし、やはり稲作がやりたくて、群馬県藤岡市の(有)古代米浦部農園で研修を受け、11年11月に研修先の近くに新規就農。



現在の経営

主な栽培品目：米、大麦、大豆および人参、その他自家用野菜

経営面積：2.8ha (うち、田1.7ha、畑1.1ha)



研修を経て、自信をもって就農

就農情報を得るため新・農業人フェアに参加し、古代米浦部農園(浦部修社長)を知りました。栽培から販売までの営農形態の考え方やモデルが明確で、稲作を中心に行っている点に、共感しました。研修中に、実践的に農業機械を扱わせてもらえたこと、販売のノウハウなどに肌身で接することができたことは、就農後に大変役立っています。

米・麦・大豆の土地利用型農業は、野菜などに比べて初期投資が大きくなる特徴があります。このため、公的融資制度の利用は欠かせません。就農に当たっての藤岡市と群馬県の藤岡地区農業指導センターとの協議、農地の確保や地権者との折衝、融資の相談、栽培品種の選定など経営計画の作成などについて、浦部社長よりアドバイスをいただきました。自己資金約300万円と公的融資を利用して、トラクター、コンバイン、田植機、乾燥機(2台)、粃すり機、精米機など最低必要な農機具を揃えました。

融資の前提となる納屋の敷地確保に苦労

新規就農者は、農地と住居の確保に苦労していますが、私の場合とくに納屋の敷地の確保に苦労しました。トラクター、コンバインなどを購入するための公的融資を受けるためには、農機具を入れる納屋があることが前提となります。道路に面しているなど条件のよい敷地が見つからず、あっても値段が高かったり、納屋として不適切な敷地だったりしました。最終的に敷地を確保できたのは、浦部社長に奔走していただいたおかげです。



稲と麦の二毛作中心に規模拡大を目指す

古代米浦部農園の栽培方法である、稲と麦の二毛作を中心に大豆を組み合わせた栽培を行っています。稲作では、田畑輪換やくず大豆などの資材を使いながら除草機を用いた抑草を基本に行い、就農1年目からほぼ予定どおり10aあたり6~7俵(品種による)の収量を得ることができました。これは、常に自立を促し、田畑での観察を大切にしている研修のおかげと感謝しています。

また、有機JAS認証の仕事をし、その仕組み、利点、書類の作成方法などを心得ていたため、有機JAS認証の取得を決め、民間稲作研究所認証センターで、2012年10月に取得しました。今後は、友人・知人への口コミやインターネットの使用を通じた消費者への直売も検討中です。

水稻を中心とした確実に収益になる品目を栽培しながら経営の安定を目指し、規模を拡大して、普通の生活ができる有機農業を確立したいと考えています。そのためにも、新規就農者に適切な農地を公的機関が斡旋してくれることを願っています。



土地利用型農業のメリット

- 野菜と異なり、米、麦などの農産物は貯蔵ができる。
- 機械の導入で、規模拡大が容易にできる。
- 農産物の加工など独自の付加価値をつけた販売もしやすい。



仲間とともに従業員として働く

上 竜樹(うえ りゅうき) 1988年生まれ

所属組織名:(有)山口農園(奈良県宇陀市)〈<http://www.yamaguchi-nouen.com/>〉

担当:生産部。ハウス内で、野菜やハーブなどの栽培管理

就農までの経緯

奈良県出身。農家の生まれではありませんが、大学で専攻した情報処理を通して、日本の農業は見せ方を変えればもっと面白いのではないかと思い、農業に興味をもつ。卒業後どのようにして農業を始めればよいかわからず、1年間のフリーターを経て、ハローワークの紹介で、オーガニックアグリスクールNARAが行っている農業職業訓練学校で1年間学ぶ。ハーブの生産や加工の幅広さに面白さを感じ、農業を仕事にしたいと決意し、山口農園に就職。

(有)山口農園の経営

主な栽培品目:有機栽培による野菜(水菜、小松菜、ホウレンソウなど)を施設10種類、露地8種類、ハーブ(イタリアンパセリ、コリアンダー、各種ミントなど)を20種類

経営面積:ハウス(100棟)約3.0ha(ハウス内面積)、露地約7ha

従業員:役員4名、正社員7名、パート18名、研修生5名

特徴:①有機農産物および有機ハーブの生産・加工・販売、②農業職業訓練学校(オーガニックアグリスクールNARA)の経営、③観光農園で収穫体験・婚活イベントを実施。

習うより慣れる

ハウスに水を撒いていることを忘れてしまい、気が付いたときにはハウスから水があふれていて、ほ場担当者に怒られたことがあります。しかし、そうなってしまった以上、次にどうすればよいかをほ場担当者の方と一緒に考え、なんとかその失敗を乗り越えました。その後は、水やりのタイミングとバランスに、気をつけるようにしています。いまだに苦労していますが、弱っていたハーブが元気良く育ってくると、励みになります。栽培を通して、新しいことを覚え日に日に身につくのが楽しみです。

本格的に農作業を始めたころは、自分の体力のなさを痛感しました。とくに、最初の夏はつらかった記憶があります。50℃を越えるハウス内では濡れるように汗が吹き出し、とにかく熱中症にならないように水分を摂り続けました。そのとき教官から言われた「習うより慣れる」という、突き放すような言葉が、以外と気楽にしてくれました。



社員同士はまるで家族のように

私が所属している生産部のほかに、収穫部、調整部、教育部、営業販売部、総務部があります。各部署だけで動くことはありません。忙しいときは応援しあったりして、各部署連動して作業を行いますので、普段から声の掛け合いが行われ、とても仲が良く家族のようです。

冬にはビニールハウスを建てます。チームワークがないと、うまく造ることができません。また、冷たい風が吹きつけるので、一致団結した手早い作業を心がけています。

農業法人へ就職することの魅力

農業を行いながら安定した収入が得られることが、就職の魅力です。私は、就職する前に農業職業訓練学校に通っていましたが、基礎的な流れや知識を身につけてから就職できました。しかし、初めて農業をする人は、最初の一年が精神的にも肉体的にも大変ではないかと思います。まずは体験から始めるのがよいと思います。

就職先を選ぶときには、歳の近い人が働いているかという点で選ぶのもよいのではないのでしょうか。つらいこともあります。身近な人に話をすれば、肩の力が抜けるように楽になります。一人ではなく、正社員・パート・研修生といる人々とともに働くのが農業法人の特徴です。自分が困ったときに助けてくれる仲間が、きっといます。その一人ひとりを大切にしてください。



生産法人から 新規就農者へのアドバイス

高齢化で「もうつくりきれないから畑を使ってくれ」と、近所の農家から声がかかることが年々多くなってきました。以前はなかった風景ですが、ヒエがかなり出ていて、やっと稲が実っているような田んぼも増えています。今後は、耕作できないほ場がもっと増えるでしょう。農家の後継者だけで農地を守り、日本の食糧生産を担うことは、もはや不可能です。したがって、新しく農業を目指す人が増えていくのはとても頼もしく、喜ばしいと思います。

でも、元々の農家の方が、「お金にならない、休みがない、仕事がつい」という理由で、農業を辞めていっています。そんななかで生産手段や栽培技術を何一つ持っていない者が、いきなり農業の世界に飛び込んでいくのは、無謀にも近い行為です。田畑は逃げていきません。準備期間や研修期間をしっかりとって、自分にあった就農地を探してみてください。

スタートの準備は仕事を辞める前にしっかりと

新規就農の窓口で相談に行くと、まず「どうして農業を志したいのか」「どこで、どんな作物をつくりたいのか」と聞かれます。この質問にまったく答えられないのでは、先方の信頼は得られません。どんな作物をつくってみたいか、その作物にはどんなところが適しているか、実際に足を運んでどんなところか見てみるなど、あらかじめいろいろアプローチをしてみましょう。仕事を辞めるのは、ある程度先が見えてからでも遅くありません。

情報を集め自分なりに就農地や作物をイメージしよう

どんな地域で就農するか、そこでどんな作物を栽培するか、そしてどんなルートで販売するかは、とても重要な問題です。まずそれが決まらなくてはスタートできません。さまざまな情報を集め、いろいろな場所へ足を運び、自分の目で見て、一つずつ決めていってください。就農地が決まれば、一生そこで農業を続けることになります。

あらかじめ体験で現場の様子を感じましょう

始めてみたら思っていた感じと違っていたということがないように、研修に入る農家や就職する法人の候補が見つかったら、どんな地域で、どんな作業をしているか、先輩はどんなふうに作業をしているのか、自分でもできそうか、見て、聞いて、現場を感じ取ってください。自分に合うか合わないかは、他の人にはわかりません。自分の感覚で選んでください。

て、現場を感じ取ってください。自分に合うか合わないかは、他の人にはわかりません。自分の感覚で選んでください。

いちばん大切なのはあなたの「強い気持ち」です

農作業は、地味な仕事が続くとときもありません。夏の炎天下での作業、凍りつくような寒さのなかでの作業と、大変なことも多くあります。そんなつらいときに体を動かすのは、農業をしたという強い気持ちです。生半可な気持ちでは、研修や仕事は続けていけません。

未来の自分をたがやすのは日々の作業・勉強にあり

目の前の小目標、さらに数年後の大目標をきちり見据え、日々の作業を自分の糧にしてください。研修前に知識や技術がなくても、日々の努力や勉強の積み重ねによって研修の効果は高まり、未来の自分の農業へとつながります。しっかりと学び、将来の「こやし」にしてください。



就職しても希望の部署につけないことも

法人が行う有機農業は規模が大きいので、さまざまな部署で作業を分担することもあります。生産現場への配属、販売の担当など、各プロセスの仕事に専念することになる場合も多いはずですが、仮に希望にそぐわない仕事であっても、「学ぶ」姿勢を大切にしましょう。点として仕事をこなし、線で仕事の流れを見て全体を把握し、安定した生産を続けていける法人のメリットを有効に取り入れて、将来の自分の経営像につなげるとよいと思います。

あなたを指導する人たちは多忙です

農家の先輩や法人の上司は、よきアドバイザーです。同時に、作業場では効率的に作業し、生計を立てる経営者でもあります。手取り足取りで新人を教育する時間は限られています。疑問点などはまず自分で調べ、整理してから質問し、報告も忘れずにしましょう。ただ聞くだけではなく、自分で見る、触れる、嗅ぐ、食べるなどの五感をとぎすまし、自分で情報を噛み砕くチカラも大切です。

あいさつをしっかり

研修が始まると、田畑で近所の方と出会うと思います。あなたは知らない人が多いでしょうが、相手はあなたがどこの研修生か知っています。必ずあいさつをして、簡単な会話ができるとよいですね。それが農村での信頼関係をつくり、いずれ



土地を借りる、大切な手がかりになります。共同で田んぼの水路管理をする農村では、見知らぬ人ともコミュニケーションが取れないと、生活していきません。

人によって教え方もいろいろ

指導のやり方には、いろいろなスタイルがあります。ていねいに何度も繰り返して教えてくれる先輩もいれば、仕事そのものを背中で見せて教える職人気質の人もあります。若い人から経験豊富な年配の方まで年齢層が広いのは、どの企業でも同じこと。世代をこえたコミュニケーション能力を磨くことも、「学び」の一つです。

農業へのステップを一步ずつ着実に積み重ねて、夢の新農業人を目指してください。将来の農業・農村を担い、新しい豊かな農の世界を創り出していくことを、私たちは心から願っています。

「農業生産法人(株)風の丘ファーム」(文/田下隆一)
<http://homepage3.nifty.com/tashita-farm/>



●有機農業研修先の一例

団体名	電話	ウェブサイト
北海道有機農業協同組合(北海道札幌市)	011-522-6226	http://www.yu-kinokyo.net/nokyo/
有機農業の推進と発展、技術のレベルアップ、農業者自ら販売・物流システムを持ち、主体的に流通・販売、販路の拡大をし、生産意欲のある農家や新規就農者の販路の受け皿となることを目的に設立しました。新規就農希望者に対しては、希望する研修内容に沿った組合員を選定し紹介しています。		
鯉淵学園農業栄養専門学校(茨城県水戸市)	029-259-2811	http://www.koibuchi.ac.jp/
有機農業とはどのような農業なのか、その理念、その技術、これからの展開方向などを体系的に学び、環境保全・循環型農業のトップリーダーたる有機農業を、明確なビジョンを持って実践する人材を育成します。		
日本農業実践学園(茨城県水戸市)	029-259-5024	http://www.nnjg04.com/
専攻コース有機野菜部では、少量多品目の野菜栽培が学べます。また、就農準備校の有機野菜コース(学園内)、有機農業コース(埼玉県比企郡小川町)の指導やほ場管理も行っています。		
民間稲作研究所(栃木県河内郡上三川町)	0285-53-1133	http://inasaku.or.tv/kenkyujo/
有機農業者の子弟や新規就農者を対象に実習を中心とした1~2年間の長期宿泊研修です。このほかに、「いのち育む有機稲作」ポイント研修、半日視察・研修、作目別(野菜、麦、大豆など)研修などがあります。		
山武市有機農業推進協議会(千葉県山武市)	0475-89-0590	http://www.sanbu-yuki.com/
長年培ってきた有機農業技術の継承、有機農業の継続と拡大のため、有機農業経営を行う若い人材を育てる組織を立ち上げました。山武の地で就農していただける方を育てるため長期研修(1年以上)を行っています。農地探しなど就農に向けたサポートも行います。		
微生物応用技術研究所農業大学校(静岡県伊豆の国市)	0558-79-0610	http://izu.biz/bioken/daigaku/daigaku.html
有機農業を学べる全寮制の農業大学校。講義と実習の連動性をはかり、ほ場の疑問を座学でとらえ、座学の学びをほ場に活かす教育施設です。当農技術科では、農業経営や生産技術を体得するとともに、地域リーダーとしての心がまえなどを習得する農家滞在型の実習があります。		
自然農法国際研究開発センター農業試験場(長野県松本市)	0263-92-6800	http://www.infrc.or.jp/
有機農業の講義と実習および有機農家や研究機関への見学などを実施します。全寮制で、作物の栽培とほ場管理を通して、作物の一生、自然農法営農技術などの修得を行います。実習は水稲、畑作、育種の3コースより選択します。研修を修了後、新規就農した方が全国各地にいます。		
白川町有機の里づくり協議会(岐阜県加茂郡白川町)	0574-77-1638	http://ku-sumu.verse.jp/yuki/
水源の里として社会的な役割を認識し、町内の有機農業に取り組んでいるさまざまなグループが連携。「有機の里」づくりを目指す活動をしています。その一環として、研修施設を利用して新規就農者・研修生を受け入れています。また、農業体験を通じた交流イベントも随時行っています。		
全国愛農会(三重県伊賀市)	0595-52-0108	http://www.ainou.or.jp/
愛農大学講座を毎年夏に9日間開催しています。座学中心で、これまでの暮らし・経済・食料・エネルギーなど社会のあり方を根本的に見直し、持続していける農的暮らしのあり方や社会を求め、実践する仲間を生み出すことを重点にしています。各種講座、研究会も開催しています。		
とくしま有機農業サポートセンター(徳島県小松島市)	0885-37-2038	http://www.komatushimayuuki.jp/
徳島県に1000人の有機農業者を育て、地域経済の発展・自然循環機能の増進に寄与することを目的に設立。1年間の長期研修制度と座学中心の短期研修制度、厚生労働省の職業訓練制度を活用した6か月の「求職者支援訓練実践コース有機農業栽培技術科」があります。		
有機のがっこう「土佐自然塾」(高知県土佐郡土佐町)	0887-82-1700	http://www.tosa-yuki.com/
「土佐自然塾」は、高知県と民間の一般社団法人が協力して立ち上げた、有機農業人材を育成する機関です。「青年就農給付金」給付対象研修実施研修機関として高知県より認定されていますので、給付金(準備型)の申請をすることができます。研修期間は1年。		
熊本県有機農業研究会(熊本県熊本市)	096-223-6771	http://www.kumayuken.org/
熊本県内で就農を希望される方々に実践的な有機農業研修を行い、有機農業での新規就農者を養成・確保する目的で、「熊本県有機農業者養成塾」を実施しています。本気で就農を目指す方を有機農業のプロが応援します。熊本県より給付金(準備型)の申請ができる団体として認定を受けています。研修期間は1年。		
かごしま有機生産組合・鹿児島有機農業技術支援センター(鹿児島県始良市)	0995-73-3511	http://kofa.jp/
「かごしま有機生産組合」は、有機農業と自然生態系に調和した生き方、暮らし方を地域に広げたいと願う人びとの集まりです。「有機農業技術支援センター」では、じっくりと腰を据えた個人指導型の研修で、宿泊施設もあります。研修後の農地の紹介、販売出荷先への斡旋も可能です。		

※応募方法、研修期間などについては直接、問い合わせください。

Q&A

有機農業&就農なんでも相談

Q. 未経験なので不安です。まずは有機農業を体験できるところがありますか？

A. あります。有機農家は、研修を通して就農した方が多く、これから農業を始めたい方に好意的です。相談会や朝市などで会った農家に相談してはいかがでしょうか。また、ウェブサイト「有機農業をはじめよう!」にも研修先情報が掲載されています。希望にあった研修先を探し、直接尋ねてみることをお勧めします。

Q. 農業で、生活していけるのか不安です…

A. 新しいことを手がけるのに不安に思うのは当たり前ですが、生計をきちんと立てている新規就農者は多くおられます。ただし、今の生活を投げ出して、いきなり農業に飛び込むのは無謀です。農家見学、農業体験を通して、どのような農業をしたいのかを明確にしながら、段階を踏んで就農しましょう。

Q. 独身で、貯金もありませんが、有機農業を始められますか？

A. 経営開始時の営農資金や、経営が軌道に乗るまでの生活資金などある程度の自己資金は必要です。また、農作業労働も慣行栽培より多い傾向にあり、生活できる農業所得を得るためにはある程度の労働力が必要です。独身の新規就農者はパートを雇う場合が多いです。農業法人で正社員として働きながら、独立就農をする方法もありますので、まずは貯金をしながら就農の計画を立てることを考えましょう。ただし、独身で貯金が少なくても就農した先輩はいます。あなたには、本当に有機農業で生きていくという覚悟はありますか？どのような農業で暮らしを立てていきたいのか、目標が決まれば協力者も得られます。

Q. 有機農業を希望していますが、まずは慣行栽培で始めることを勧められました…

A. 有機農業で栽培する場合、もっとも大切なのは土づくりです。多種多様な土の生きものの働きを引き出す栽培方法は、化学肥料や農薬に頼った慣行栽培とは基本的に異なります。有機農業で就農したいのであれば、有機農業で始めることをお勧めします。慣行栽培で就農してから有機農業に切り替えると、就農時と切り替え時の2度、苦勞するからです。また、有機農業の田畑の状態は年々の積み重ねでよくなり、栽培も楽になります。



Q. 農村の付き合いは大変と聞き、不安です…

A. 農村で生活している方のほとんどは、同じ地域で生まれ、暮らしているので、それぞれの家族構成や暮らしをお互いによく知っています。新しく農村で生活するには、受け入れてもらうための努力が必要です。地域の集まりには必ず出席し、地域の一員としてともに暮らしていく気持ちを一日も早く理解していただくようにしましょう。有機農業を実施する場合でも、地域の気象条件、土壌条件、播種適期など慣行栽培農家から学ぶべきことはたくさんあります。身近なことからコミュニケーションをとることも大切です。

Q. 有機農産物の売り先を見つけるには？

A. 有機農産物の販売方法は、多品目少量による消費者との提携、地場産業やレストランとの直結、得意な品目を各自栽培する共同出荷、JAや流通、加工業者へのお荷など、いろいろなスタイルがあります。新規就農の場合、最初は共同で出荷しているグループへの加入をお勧めします。そこで、消費者のニーズにあった出荷基準などを身につけるとともに、美味しい農産物を出荷している農家から栽培のコツなどを学ぶことも大切です。グループのさまざまな農家との付き合いを通して、自分のスタイルにあった販売方法を見つけていってください。

Q. 就農してから失敗する人は、どこでつまづくのでしょうか？

A. まず、栽培技術です。農業を仕事にする以上、販売可能な農産物を生産しなければなりません。土づくりには少なくとも2～3年はかかることを考慮した栽培計画が大切です。次に、販路です。せっかくよい農産物が生産できても、販売先がなければ暮らしの糧にはなりません。そして、家族の理解です。子供が就学すれば教育費がかかるので、それまでに農業で暮らしていけるようにする必要があります。そのためにも、有機農業で暮らしている農家で研修を受け、栽培や販売方法など自分のスタイルを明確にし、3年程度は持ち出しを覚悟で就農することをお勧めします。

Q. 女性一人でも、有機農業を始めることはできますか？

A. 女性一人でも就農は可能です。就農したい地域の有機農家のもとで研修することから始めてみてはいかがでしょうか。研修先から女性の感性や体力にあわせた栽培や販売のスタイルについてアドバイスを受けながら、独立に向けて準備をするのがよいでしょう。



Q. 市町村に相談しましたが、反対されました…

A. あなたが有機農業で就農を希望したことに反対されたのでしょうか。それとも、就農に対する心構えの甘さに対して、否定的な表現をされたのでしょうか。市町村の就農担当者は、多くの相談を受け、就農者を育成しています。本当に相談した市町村で就農したいのなら、あきらめずに相談し、一つずつ就農への課題を解決していくことです。情報不足もあり、有機農業での就農に不安を抱く担当者が多いのも事実ですが、就農担当者を動かすだけのあなたの覚悟が大切だと思います。

Q. 作付け品目の選び方は？

A. 就農する地域の条件により、栽培作物、品種、播種時期などが異なります。まず、就農地でのどのような作物が、どの時期に、どのようにして栽培されているのかを調べましょう。販売方法により品種が異なることもあります。近くの有機農家の栽培作物も参考になります。

Q. 就農地域の選び方のポイントは？

A. まず、どのような農業をやりたいのか、就農スタイルを明確にすることです。そして、その地域ですっと暮らし続けるのですから、地域の景色、気候などを気に入ることも、大切なポイントになります。就農後に相談に乗ってもらえる有機農家が近くにいることも重要です。

Q. 有機JASの利点と取得の判断を教えてください

A. 有機農産物の不適切な表示が行われたり生産基準の不統一が見られたりするなどの混乱を避けるため、有機JAS制度が始まりました。有機農産物をスーパーなど不特定の消費者を対象として販売するには、有機JAS認証が有効になります。ただし、有機JAS認証の取得には毎年経費が掛かるため、経費に見合った価格で販売できるかどうかをよく考えてください。有機農家には、「有機」、「オーガニック」などの表示はせずに、自らの農産物の特徴を紹介した販売をしている方も多くいます。販売スタイルに応じて判断しましょう。



有機JAS規格に認定された農産物と農産物加工食品には「有機〇〇」などと表示することができます。

◎都道府県新規就農相談センター

都道府県青年農業者等育成センター	電話番号	都道府県農業会議	電話番号
(公財)北海道農業公社 北海道農業担い手育成センター	0570-044-055	北海道農業会議	011-281-6761(直)
(公社)あおもり農林業支援センター	017-773-3131	青森県農業会議	017-774-8580(直)
(公社)岩手県農業公社	019-623-9390	岩手県農業会議	019-626-8545(直)
(社)宮城県農業公社	022-275-9192	宮城県農業会議	022-275-9164(直)
(社)秋田県農業公社	018-893-6212	秋田県農業会議	018-860-3540(直)
(公財)やまがた農業支援センター	023-641-1117	山形県農業会議	023-622-8716(直)
(財)福島県農業振興公社	024-521-9848	福島県農業会議	024-524-1201(直)
(公財)茨城県農林振興公社	029-239-7131	茨城県農業会議	029-301-1236(直)
(公財)栃木県農業振興公社	028-648-9511	栃木県農業会議	028-648-7270(直)
(公財)群馬県農業公社	027-251-1220	群馬県農業会議	027-280-6171(直)
(社)埼玉県農林公社	048-558-3555	埼玉県農業会議	048-829-3481(直)
(公財)千葉県水産振興公社	043-222-9136	千葉県農業会議	043-222-1703(直)
(公財)東京都農林水産振興公社	042-528-1357	東京都農業会議	03-3370-7145(直)
神奈川県農業技術センターかながわ農業アカデミー ※1	046-238-5274	神奈川県農業会議	045-201-0895(直)
(財)山梨県農業振興公社	055-223-5747	山梨県農業会議	055-228-6811(直)
(社)岐阜県農畜産公社	058-276-4601	岐阜県農業会議	058-268-2527(直)
(社)静岡県農業振興公社	054-250-8991	静岡県農業会議	054-255-7934(直)
(公財)愛知県農業振興基金	052-951-3626	愛知県農業会議	052-962-2841(直)
(公財)三重県農林水産支援センター	0598-48-1226	三重県農業会議	059-213-2022(代)
(社)新潟県農林公社	025-281-3480	新潟県農業会議	025-223-2186(直)
(公社)富山県農林水産公社	076-441-7396	富山県農業会議	076-441-8961(直)
(財)いしかわ農業人材機構	076-225-7621	石川県農業会議	076-257-7066(直)
(社)ふくい農林水産支援センター	0776-21-5475	福井県農業会議	0776-21-0010(代)
(社)長野県農業担い手育成基金	026-231-6222	長野県農業会議	026-234-6871(直)
(公財)滋賀県農林漁業担い手育成基金	077-523-5505	滋賀県農業会議	077-523-2439(直)
(公社)京都府農業総合支援センター	075-417-6847	京都府農業会議	075-441-3660(直)
大阪府都市農業参入サポート窓口 ※1	06-6210-9596	大阪府農業会議	06-6941-2701(直)
(社)兵庫みどり公社	078-361-8114	兵庫県農業会議(ひょうご就農支援センター)	078-391-1222(代)
(財)奈良県農業振興公社	0742-23-6148	奈良県農業会議	0742-22-1101(代)
(財)和歌山県農業公社	073-433-5547	和歌山県農業会議	073-428-4165(直)
(財)鳥取県農業農村担い手育成機構	0857-26-8350	鳥取県農業会議	0857-26-8371(直)
(公財)しまね農業振興公社	0852-20-2872	島根県農業会議	0852-22-4471(直)
(財)岡山県農林漁業担い手育成財団	086-226-7423	岡山県農業会議	086-234-1093(直)
広島県農業経営相談窓口 ※1	082-224-0129 ※2	広島県農業会議	082-545-4146(直)
(財)やまぐち農林振興公社	083-924-8900	山口県農業会議	083-923-2102(直)
(財)徳島県農業開発公社	088-621-3083	徳島県農業会議	088-678-5611(直)
(財)香川県農業振興公社	087-831-3211	香川県農業会議	087-812-0810(直)
(財)えひめ農林漁業担い手育成公社	089-945-1542	愛媛県農業会議	089-921-4438(直)
(公財)高知県農業公社	088-823-8618	高知県農業会議	088-824-8555(直)
(公財)福岡県農業振興推進機構	092-716-8355	福岡県農業会議	092-711-5070(直)
(財)佐賀県青年農業者育成センター	0952-25-7106	佐賀県農業会議	0952-23-7057(直)
(財)長崎県農林水産担い手育成基金	0957-25-0031	長崎県農業会議	095-822-9647(直)
(公財)熊本県農業公社	096-385-2679	熊本県農業会議	096-384-3333(直)
(公社)大分県農業農村振興公社	097-535-0400	大分県農業会議	097-532-4385(直)
(公社)宮崎県農業振興公社	0985-51-2631	宮崎県農業会議	0985-73-9211(直)
(公社)鹿児島県農業・農村振興協会	099-213-7223	鹿児島県農業会議	099-286-5815(直)
(財)沖縄県農業開発公社	098-882-6801	沖縄県農業会議	098-889-6027(直)

※1 指定法人ではありませんが、就農相談を行っています。 ※2 火、水、木曜日10:30から16:00

◎国および都道府県の有機農業担当

部署名		電話番号	部署名		電話番号		
農林水産省	生産局農産部	農業環境対策課 有機農業推進班	03-6744-2114	大阪府	環境農林水産部 農政推進課 地産地消推進グループ	06-6210-9590	
	北海道農政事務所	農政推進部 農政推進課	011-642-5461	兵庫県	農政環境部	農林水産局農業改良課 環境農業係	078-362-9210
	東北農政局	生産部 生産技術環境課	022-221-6179	奈良県	農林部	農業水産振興課 環境係	0742-27-7442
	関東農政局	生産部 生産技術環境課	048-740-0447	和歌山県	農林水産部	農業生産局果樹園芸課 農業環境・鳥獣対策室	073-441-2905
	北陸農政局	生産部 生産技術環境課	076-232-4893	鳥取県	農林水産部	生産振興課 生産環境担当	0857-26-7649
	東海農政局	生産部 生産技術環境課	052-201-7271 (2265)	島根県	農林水産部	農畜振興課 有機農業グループ	0852-22-6477
	近畿農政局	生産部 生産技術環境課	075-414-9722	岡山県	農林水産部	農産課 安全農業推進班	086-226-7422
	中国四国農政局	生産部 生産技術環境課	086-224-4511 (2211)	広島県	農林水産局	農業販売戦略課	082-513-3585(代)
	九州農政局	生産部 生産技術環境課	096-211-9558	山口県	農林水産部	農業振興課 技術防疫・循環型農業推進班	083-933-3366
	内閣府	沖縄総合事務局	農林水産部 生産振興課	098-866-1627	徳島県	農林水産部	とくしまブランド課 安全安心推進担当
部署名		電話番号	部署名		電話番号		
北海道	農政部	食の安全推進局食品政策課	011-231-4111 (27-674)	香川県	農政水産部	農業経営課 環境・植物防疫グループ	087-832-3411
青森県	農林水産部	食の安全・安心推進課 環境農業グループ	017-734-9353	愛媛県	農林水産部	農業振興局農産園芸課	089-912-2565
岩手県	農林水産部	農業普及技術課 技術環境担当	019-629-5656	高知県	農業振興部	環境農業推進課	088-821-4531
宮城県	農林水産部	農産園芸環境課 環境保全班	022-211-2846	福岡県	農林水産部	食の安全・地産地消課	092-643-3571
秋田県	農林水産部	水田総合利用課 土壌・環境対策班	018-860-1784	佐賀県	生産振興部	園芸課	0952-25-7114
山形県	農林水産部	環境農業推進課	023-630-2481	長崎県	農林部	農業経営課 環境班	095-895-2933
福島県	農林水産部	環境保全農業課	024-521-7342	熊本県	農林水産部	農業技術課 グリーン農業推進班	096-333-2383
茨城県	農林水産部	産地振興課 工口農業推進室	029-301-3931	大分県	農林水産部	おおいブランド推進課 安全農業推進班	097-506-3631
栃木県	農政部	経営技術課 環境保全型農業担当	028-623-2286	宮崎県	農政水産部	営農支援課	0985-26-7132
群馬県	農政部	技術支援課 生産環境至農業環境保全係	027-226-3061	鹿児島県	農政部	食の安全推進課	099-286-2885
埼玉県	農林部	農産物安全課	048-830-4049	沖縄県	農林水産部	営農支援課	098-866-2280
千葉県	農林水産部	安全農業推進課 環境農業推進室	043-223-2773				
東京都	産業労働局	農林水産部 食料安全室	03-5320-4880				
神奈川県	環境農政局	農政部農政課 農業企画グループ	045-210-4414				
新潟県	農林水産部	農産園芸課 生産環境係	025-280-5296				
富山県	農林水産部	農業技術課 工口農業推進係	076-444-8292				
石川県	農林水産部	農業安全課 農畜産安全グループ	076-225-1627				
福井県	農林水産部	水田農業経営課 福井米ブランド推進室	0776-20-0427				
山梨県	農政部	農業技術課 研究環境担当	055-223-1616				
長野県	農政部	農業技術課 環境農業係	026-235-7222				
岐阜県	農政部	農産園芸課 グリーン農業担当	058-272-8435				
静岡県	経済産業部	農林業局農山村共生課 農産環境班	054-221-3526				
愛知県	農林水産部	農業経営課 環境・植防グループ	052-954-6411				
三重県	農林水産部	農産物安全課 環境農業グループ	059-224-2543				
滋賀県	農政水産部	農業経営課 環境こだわり農業担当	077-528-3838				
京都府	農林水産部	農産課	075-414-4953				

◎有機JAS制度関係連絡先

部署名		電話番号	
農林水産省	消費・安全局	表示・規格課	03-3502-8111(代)
	北海道農政事務所	消費・安全部 表示・規格課	011-642-5461(代)
	東北農政局	消費・安全部 表示・規格課	022-263-1111(代)
	関東農政局	消費・安全部 表示・規格課	048-600-0600(代)
	北陸農政局	消費・安全部 表示・規格課	076-263-2161(代)
	東海農政局	消費・安全部 表示・規格課	052-201-7271(代)
	近畿農政局	消費・安全部 表示・規格課	075-451-9161(代)
	中国四国農政局	消費・安全部 表示・規格課	086-224-4511(代)
	九州農政局	消費・安全部 表示・規格課	096-211-9111(代)
	内閣府	沖縄総合事務局	農林水産部 消費・安全課



●有機農業相談窓口

都道府県	団体名	電話番号
全 国	有機農業参入全国相談窓口	0558-79-1133
北海道	津別町有機農業推進協議会	0152-76-2151
北海道	北海道有機農業生産者懇話会	011-385-2151
北海道	財団法人微生物応用技術研究所名寄研究農場	01654-8-2722
岩手県	一関地方有機農業推進協議会	0191-75-2922
岩手県	岩手県農林水産部農業普及技術課	019-629-5652
宮城県	宮城県農林水産部農産園芸環境課	022-211-2846
秋田県	NPO法人永続農業秋田県文化事業団	018-870-2661
山形県	遊佐町有機農業推進協議会	0234-72-3234
山形県	山形県農林水産部環境農業推進課	023-630-2481
福島県	財団法人福島県農業振興公社 青年農業者等育成センター	024-521-9835
福島県	福島県農業総合センター有機農業推進室	024-958-1711
茨城県	NPO法人アグリやさど	0299-51-3117
茨城県	茨城県農林水産部農産課	029-301-1111
茨城県	NPO法人あしたを拓く有機農業塾	090-2426-4612
栃木県	NPO法人民間稲作研究所	0285-53-1133
栃木県	栃木県農政部経営技術課環境保全型農業担当	028-623-2286
群馬県	高崎市倉淵町有機農業推進協議会	027-378-3111
千葉県	有機ネットちば	0476-94-0867
千葉県	山武市有機農業推進協議会	0475-89-0590
東京都	東京都産業労働局農林水産部食料安全室生産環境係	03-5320-4834
東京都	NPO法人日本有機農業研究会	03-3818-3078
新潟県	三条市農林課	0256-34-5511
新潟県	にいがた有機農業推進ネットワーク	025-269-5833
新潟県	NPO法人雪割草の郷	0256-78-7234
石川県	金沢市有機農業推進協議会	076-257-8818
長野県	公益財団法人自然農法国際研究開発センター	0263-92-6800
静岡県	一般社団法人MOA自然農法文化事業団	0558-79-1113
愛知県	オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村	052-265-8371
三重県	社団法人全国愛農会	0595-52-0108
滋賀県	NPO法人秀明自然農法ネットワーク	0748-82-7855
兵庫県	兵庫県農政環境部農林水産局農業改良課	078-362-9210
奈良県	有限会社山口農園～オーガニックアグリスクールNARA	0745-82-2589
和歌山県	和歌山県農林水産部農業生産局果樹園芸課農業環境・鳥獣害対策室	073-441-2905
岡山県	岡山商科大学経営学部岸田研究室	070-5424-2729
広島県	食と農・広島県協議会	090-3177-0438
徳島県	NPO法人とくしま有機農業サポートセンター	0885-37-2038
香川県	香川県農政水産部農業経営課	087-832-3411 (3748)
愛媛県	今治市有機農業推進協議会	0898-36-1542
高知県	有機のがっこう「土佐自然塾」	0887-82-1700
熊本県	くまもと有機農業推進ネットワーク	096-384-9714
大分県	NPO法人おおい有機農業研究会	097-567-2613
鹿児島県	鹿児島有機農業技術支援センター	0995-73-3511
沖縄県	財団法人微生物応用技術研究所大宜味農場	0980-43-2641

※詳しい情報はウェブサイト「有機農業をはじめよう!」にも掲載しています。

●必要な情報をウェブサイトで提供中!

Be Farmer きっと見つかる あなたの農業
全国新規就農相談センター
www.nca.or.jp/Be-farmer

有機農業参入促進協議会
yuki-hajimeru.net



新・農業人フェア
農業法人求人
新規農支援情報
などを掲載!



研修先
講習会
相談窓口
の情報などを掲載!

有機農業を仕事に!!

発行/全国農業会議所
全国新規就農相談センター
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル2階
TEL:03-6910-1133 FAX:03-3261-5131

発行日/2013年1月

編集/大江 正章、柴山 進、田下 隆一
西村 和雄、藤田 正雄

イラスト/高田 美果

印刷/川越印刷株式会社